

夏に想う

会長 飯田 精鷹

今年も暑い夏がやってきた。毎年終戦記念日頃には、戦後が語られて来たが、今年は節目の六十年、私が生まれた大正十五年から八十年のうち、小・中学校、陸士の時代、つまり昭和二十年の終戦に到るまでに出会った先生や漢詩、漢文、短歌など

院吟日本流精岳

ちよあ

第 2 4 号

平成 1 7 年 9 月

報弘会精岳田代千

自分に厳しく

平成十七年度岳精流指標

少しく想い出して見たい。小学校時代、世の中の事はよく解からなかったが、音楽好きの耳に入ってきた詩吟は乃木希典の「山川草木轉た荒涼」であり、軍靴の音漸く高くなり、頼山陽の「鞭聲肅々夜河を過る」であった。各家庭のラヂオからも、又道を行く人の口からも聞こえて来た。かく日本の巷は軍国としての雰囲気醸されていた。そして吾々少年は当然の事として受けていた。

小学校五年の時、若い男子の先生が赴任され、授業中に「男児立志出郷關 學若無成不復還 埋骨何期墳墓地 人間到處有青山」を教えられ、漢詩と、その中の「青山有り」に深く感銘を受けた。

中学に入り漢詩、漢文を習い、漢詩の文語調に感動し、白髪三千丈の大げさな表現、反面豊かな思考などに驚いた。中学二年の時、担当の先生から「鼓腹擊壤の詩」を学び、腹鼓を打ち、大地を叩いて歌う世の太平を楽しむさま、善政による平和なさまも学び、平和な生活を思った事を覚えていた。また古文の先生から「愚公山を移す」と言う愚公伝、つまり絶えず努力すれば遂には成功するの譬を教えて戴き、また「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽ろんず可からず」と時の大切さを知った。

当時、中学には軍から配属将校が派遣され、意気盛んに「『国破れて山河在り』と支那の唐代の詩人が詠ったが、国が敗れたら山河は無いよ」と話された。

終戦で荒れた山河は残った。しかし今日、人情溢れる美しい人々は、心はどうなっただろうか。問題は山積、それはさておき、当時夏の合宿で歌った琵琶（城山）で「それ達人枯は夢か幻か」は吟として未だに耳に残る。戦局も相当進んだ頃「我が胸の燃ゆる思いに 比ぶれば 煙はうすし桜島山」平野国臣作は、當時の国難に立ち向かう健気な少年の心意気であり、学校の湖畔で大合唱していたのが心深く刻まれ、想い出される。



星野 久山（清水）

岳精流日本吟院全国吟道大会

宗家の吟道七十周年・米寿を祝う

河田日本吟剣詩舞振興会長が、挨拶で述べられたように「日本固有の文化を継承発展」に心血を注がれた宗家の吟道七十年と米寿を祝う大会が、好天に恵まれた六月十二日、川崎市教育文化会館で全国から二千余の会員が集い開催された。

今年は全国の著名な吟剣詩舞の宗家・家元の先生方が出席され、慶祝に華麗な芸をご披露された。

恒例の合吟は、今年から三十名以上登壇の場合は男女別となり、男子は飯田精鷹会長先導で「偶作」横井小楠作、女子は菅原琴風婦人部門長先導で「静夜思」李白作。

今年「構成吟」吟詠で綴る宗家吟道七十年が主役。大正、昭和、平成の激動の3時代に日本男子として堂々と正面から向い、平和と人間愛を貫いた宗家の足跡には会場の全員が深い感銘を受けた。更に、戦傷を受けられたのが山西省太原と伺い、王維の出生の地、白居易の本貫地であることに何かの縁を感じた。

千代田よりは、ナレーターに昨年吟に続いて鈴木重風ハザマ教場長、吟詠に飯田会長、磯田龍貞副会長、剣舞に金子千峰（東陽町）。フィナーレを飾る宗家の「日本を愛す」のバ

ック合吟に磯田副会長、林龍吾、菅原克風、堀哲山、徳本順山、萩原晴泉の諸氏が登壇し、迫力溢れる男声のハーモニーは圧巻であった。

宗家は「米寿を迎える事が出来たのは、天・地・人あらゆる事がおかげで今日あるとしみじみ考える昨今です」とご挨拶され、続いて平成十八年一月に宗家を宗嗣に譲り「家元」を称されると正式に発表された。時の流れとは申せ寂しさを感じます。

宗家の、永年にわたるご恩に応えるには、個々の精進に加え、一人でも多くの若い世代の会員を仲間に加え、岳精流の隆々たる姿を見て頂けるようにすることを肝に銘じたい。

千代田の大会の設営・運営面での役割は、昨年に続き、田園支部と接待。丸の内第二、清水教場、婦人部門が担当し申し分なかったとの高い評価を頂いた。吉川龍鐘総括、太田晴風事業部門長はじめ皆さんのご苦勞に感謝致します。

全国吟剣詩舞道吟詠コンクール
東日本大会昨年に続き大健闘

地区予選から廿三名が入賞を果たし、五月の東京都大会に挑戦した。千代田が挑戦した一般二部、三部では岳精流は厳しい状況で、一般三部において、金子澄泉（東陽町）さんが七位、林教場長が十一位に入賞された以外は一名の入賞という結果であった。

昨年に続いて七月三日の東日本大会へ挑戦のお二人はハイレベルの接戦の中で

四位 林 龍吾

十位 金子 澄泉

とお二人共に入賞という素晴らしい成績を収められました。

特に林教場長は、全国大会出場の二位まであと一步の大健闘、二年連続入賞の金子さんとお二人のご活躍に大きな拍手をおくりましょう。

なお、幼少年の部で六郷岳精会の伊達佳内子さん（小学3年生）が昨年に続き見事優勝。九月十八日の全国大会へ出場されます。岳精流の希望の星として成長を見守りたいものです。



新任副教場長（七月一日付け）

神田

池田 康山

千代田創立廿周年記念大会

(準備委員会レポート2)

一、“開催日並びに会場決定”

開催日 平成十八年十月

廿九日(日)

会場 新宿明治安田生命

ホール

祝賀会 新宿京王プラザホテル

二、準備委員会(八月二日)申し合
わせ事項。

イ、実行委員会発足は平成十八年

一月(組織内定十月)。

ロ、記念大会の特例として、行事

は教場担当制ではなく、全員総

力で取り組む。

ハ、実行委員会活動に先行して、

次の4プロジェクトを本年九月

より発足する。

① 企画構成吟

② 二十周年史

③ プログラム

④ 祝賀会

「式典関係」「進行」「接待」

「総務」「経理」等については

実行委員会ベースで行われる事

となるが、必要に応じてプロジ

エクト編成を行なう。尚「武道

館出吟プロジェクト」に関して

は独立した取進めを行なうこと
となる。

三、企画構成吟の基本与条件。

① 主題テーマは「千代田」即ち

「江戸三百年」とする。

② 所要時間は約九十分以内。

③ 各教場毎に、主題に沿った企

画を作成提案する。

④ 全員参加を旨とし、教場の枠

に捕らわれずゲストも交えてパ

ラエティに富んだ楽しい内容と

する。

⑤ 最初と中間、最後に全員参加

の企画を配慮する。

⑥ 企画推進並びに総括は、原則

的にプロジェクトチームにて行

う。

『私の心に残る一詩』その十二

草加分室長 太田 翠風

早に白帝城を発す 李白

朝辭白帝彩雲間 千里江陵一日還

兩岸猿聲啼不住 輕舟已過萬重山

好きな詩は沢山ありますが、想

い出の吟は、入会二、三年ほどで

迎えた千代田十周年大会で吟じた

この詩です。二次会では元気だが

教室ではとても静かと、会長から
も注意を頂いていた初々しい？頃
でした。

天皇陛下も訪中時に口にされた
あまりにも有名な大詩人李白の名
作ともまだ知らない頃でしたが、
先生にお勧めいただき、懸命に吟
じました。私としては初めて吟ら
しく大きな声で吟ずる事ができ、
とても嬉しかった事を今でも覚え
ています。

旧明治生命館、新しく高層のビ
ルとなり残念ながら現在是有りま
せんが二重橋から皇居が眺められ、
その先に新宿副都心のビル街が霞
んで見える素晴らしい会場でした。
二次会の席で、何と宗家の前で
図々しくも再度吟じ、今思うと恥
ずかしく顔が赤くなりましたが、大
切な思い出になりました。
来年は千代田廿周年、想い出の
吟が又一つでも増やせるよう楽し
みにしております。



平成十七年度温習会

今年の成果を思いきり吟じよう

今年の温習会は丸の内第一、東陽町、丸の内女子の三教場を担当教場として次の通り開催します。

日時 十一月廿六日(土)

場所 豊島区立南大塚ホール
JR大塚駅南口から

懇親会

徒歩5分
ラパスホール
会場から徒歩5分

内容の詳細は決定次第お知らせしますが、独吟コンクールを無伝以下初伝、中伝以上の3グループに分けて今年の成果を披露して頂くことにしております。参加者は連吟で全員が登壇することになります。武道館合吟コンクールに出場する男女チームの合吟披露、吟剣詩舞吟詠コンクール入賞者凱旋吟、コンダクター演奏、詩歌研修担当による構成吟、会長指導吟、等が予定されています。廿周年記念大会を一年後に控え、それぞれが役割を認識して、今年の実習成果を披露しましょう。今年の実習成果でも内容の充実した会にしたと思います。

第三十八回全国吟剣詩舞道大会
合吟コンクール本部女子に参加

十一月十三日(日)日本武道館で開催される大会には、本部男女2チームの参加が決まっております。男子に続き女子チームも昨年の四位以上を目指して渡精華副幹事長、前澤龍淳婦人部長のご指導で六月十八日より特訓が開始された。

吟題 楠公子に決るるの図に題す

本数 八本

頼 山陽作

千代田には男子同様出場人数の約3割の出吟が要請され、次の方々が練習に参加している。昨年の出吟者の目を見張るような上達振りには、周囲の認めるどころ。吟力の向上の絶好のチャンスを活かして下さい。
田中香風、元広恵山(丸二)
太田翠風(草加)花山桜風(東陽町)
池田康山、渡辺笙泉、山崎洋子、小林公子(神田)橋本淳山、加藤有泉、上村芳子(新宿)樋沢桃山(鍊水)山手遥泉、板橋禮泉、藤原寿子(丸女)

昇伝審査を終えて

東陽町 三ッ井 愛泉

詩吟の入会動機？意志薄弱な私は勉強後の懇親会に魅せられて入会しました。覚えれば段々と難しく思え出席率も悪くなりました。そんな時、諸先生・先輩に「大きな声が出る様になつたね。上手になつたね」と下手でも笑顔で励まされ、はや四年近くになりました。

昇伝審査も年々緊張が増し、今年は足がガタガタ、前にのめりそうな感じて、汗を掻きながら無事終わリホッとした時、橋本龍淳先生がコンダクターを弾き、再度吟じさせられ、私はどこが間違いなのか半信半疑で顔を真赤にししながら、先生の高音に続いて吟じました。終わった時「自分分は五本しか出ないと思わず挑戦して下さい。出来そうですよ」とのお言葉を頂き、目標が出来ました。

日々の生活では味わえないこの緊張感、吟ずる楽しさ、作者の詩への情、コンダクター等自分を磨き、大好きな懇親会へと、下手の横好きが私の趣味になると信じ、悪戦苦闘しながら又一年頑張りたいと思います。



漢詩（五）

憂愁を抱えた杜甫

東陽町 渋谷 辰山

中国最大の詩人として李白と並称される杜甫は、玄宗の即位の年（七一）に洛陽に近い河南省鞏県で生まれ、家系に西晋の名將で學者の杜預や、祖父に則天武后朝の宮廷詩人杜審言を持ち、早くから官界に進んで王朝に力を尽くそうと志しましたが、結局は科擧に受からず就職にも失敗して失意憂愁の人生を送ることになります。

廿代から十余年、呉・越・齊・趙の各地を歴遊しつつ見聞を広めましたが、現存する数少ない彼の作品から既に律詩の体に習熟していたことがうかがわれます。三十三歳のとき、長安を逐われた李白と奇跡的な出会いをします。一目見て人並みはずれたその風采に心酔し共に河南の地を経巡りました。翌年魯の石門で別れた後、二度と会う事は無かったけれど折にふれ李白を偲んで十五首も詩を残しています。

三十五歳、意を決して長安で世に出る途を求めますが、なお志を得ず、以後十年ほど不遇の生活が続きます。この時期、杜甫の詩は李白の強烈な個性に刺激を受けて幅を拡げ、恵ま

れない境遇の中で次第に深みを加えていったのです。「貧交行」は身の不遇と貧困を嘆き憤った、四十一歳（七五二）の作です。四十四歳の時漸く官職に就いたものの安祿山の乱に遭遇して、杜甫の詩は社会と自身の境遇の激変を体験して大きく伸びました。靈武で即位した肅宗のもとに参じようとして賊軍に捕えられ、長安に軟禁されます。代表作「春望」の「国破れて山河あり」は幽閉二年目の四十六歳の作です。



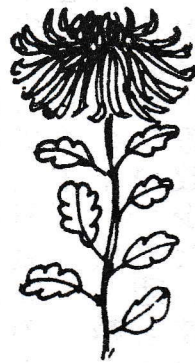
その後長安を脱走し肅宗に拝謁して左拾遺に拔擢され、彼にとって生涯唯一の華やかな時期で賈至、王維、岑参等と競作するなど、その輝きがまた格調高い律詩に磨きをかけ、いきましました。「人生七十古来稀なり」と彼にしては珍しく頹廢的な気分が強く出ている「曲江」は此の頃の作です。

しかし拔擢も束の間、生一本の性格が禍して左遷の憂き目に遭い、やがて四十八歳官を捨て家族を伴って漂白の旅に出ます。この年は貧窮食を求めて「一歳四遷」という慌ただしい移動を体験しましたが、ここでまた彼の詩は皮むけていきます。四十九歳（七六〇）節度使嚴武の厄介になって成都郊外の浣花溪に草堂を築き、嚴武や高適の援助を受けて生涯での安らぎの時期を得、詩は円熟の域に達します。一方望郷の思いは年を追って増大し「絶句」や「歸雁」の中に昇華して行きます。五十で没し蜀の地も乱れた為、安住の地を捨て貧と病に苦しみ乍ら、長江を下って再び放浪の旅に出ます。「天地的」は忠州から靈安へ下る間の作。五十五歳一家は奉節に移りましたが、そこでの二年間に「秋興」「登高」「復愁」等の傑作をはじめ四三〇首の作が生み出され、杜甫の詩芸術の総仕上げの感があります。

更に長江を下って洞庭湖畔で「老病孤舟」遙か都を望んで「岳陽樓に登る」を詠じた後、湘水を上下しますが、五十九歳（七七〇）精魂尽きたか、岳州へ向かう舟の中で帰郷の夢空しく没しました。

杜甫の詩は、雄渾、沈痛、憂愁、忠厚の意に満ちています。詠ずる内

容は多様豊富であり、特に正義感、人間愛に基づいて現実社会を直視し描写して唐王朝の栄枯盛衰が如実に示されたことから「詩史」と称せられます。また李白の「詩仙」に対して誠実な人柄と儒教的信念から「詩聖」と称えられ、律詩を得意として李白の絶句と並んで「李絶杜律」の称があります。著作に「杜工部集」廿卷があり、千五百余首現存しています。（詩歌研修担当リーダー）



平成十八年度昇伝審査指定吟題

初伝 山亭夏日 高 駢
古 城 瓜生田山桜
中伝 初めて香山院に入つて 白居易
南湖にて夜歌者を聞く 朱 彝尊
奥伝 (短歌二題 後報) 京師にて家書を得たり 袁 凱
山 居 赤田 臥牛
(俳句二題 後報) 無 述 懐 頼 山陽
皆伝 無 心 良 寛

訂正とお詫び

前号で紹介の千代田の本部組織に間違いがありました。訂正してお詫びします。

正 二宮 祥泉 (ハザマ)
誤 吟楽部門サブリーダー
コンクール部門サブリーダー



『新会員紹介』

◇丸の内第一教場
小磯 伸広氏 (八月入会)

山口朱山さんのプールの友達、以前から漢詩に関心があり、詩吟に憧れていて、思いがけず誘いを受け入会とのこと。カラオケが得意との事です。詩吟に又新たな発声練習を学んでいきたいと、立てたスケジュールは、きちんと取り組む真面目な方です。

◇神田教場
小林 公子さん (四月入会)

池田康山さんと廿七年振りに町中で偶然お会いし、お誘いを受けました。実は詩吟を習っていた先生が七年前に他界され、教場を捜していたところで早速神田教場を見学させて戴きました。「井の中の蛙大海を知らず」を痛感しました。初心に戻り頑張って行きたいと思っています。

◆平井 紅風さん

(丸の内第一教場休会中)
八月十一日ご逝去されました。享年八十歳、千代田発足時からの会員のお一人でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

六十年前の八月十五日も、今年のよう暑い真夏の日でした。焦土の中で生まれた方が還暦を迎えます。あの大戦の意味を考える報道や、戦の被害者の立場となった国々の現況の記事も多く見られます。敗戦国日本では、「平和日本、新日本再建」をスローガンに、一人一人の国民が、反省と荒廃した国土の再建に汗を流して、平和を祈り、この六十年間戦争と全く関わらず技術向上、経済発展に立ち向いました。国連の2割を超える分担金を黙々と引受け、先進国として自他共に認められ、後進国に巨額の援助を赤字財政の中から拠出しています。しかし、次世代に日本が何処と戦争をし、被害を与えたかを教えなかった我々の世代の付けが残ってしまいました。また、不足していた近隣諸国に日本を理解して貰う努力は、今後続けて行かねばなりません。更めて、世界の戦没者へ祈りを捧げます。(八田)